佛ノ境ニハ、常々佛事ヲ談ジ、佛語ヲ誦スルニ依テ、鳥獸ノ音ニ佛事ニ聞ナスト見ヘタリ、何事モ人ノ心ノ呼ト知ベシ、慈悲心鳥ハ形鷹ニ似テ、大サ白頭鳥ヨリ一層大ニシテ、頭背翅尾共ニ黑シ、胸腹淡褐ニシテ細黑ノ横條三行アリ、嘴脚黑シト、桃洞遺筆ニ見ヘタリ、

〔飼鳥必用下〕佛法僧

此鳥日光山ゟ雛鳥にて出る鳥也、勿論江戸へ持參候、ひとり餌までは能持也、形は時鳥ゟ少し、胸の黑み多く、腹の斑もあかく、目は黃色の輪あり、黑目也、此鳥塒したるをいまだみず、餌飼鱣にて等分餌也、是を實心と言人も有、

實心鳥

此鳥高野山ゟ出るといへ共、未現鳥を見ず、去旅人實心の皮と言て持來るを見たるに、時鳥の雌の赤ふにて餘程大きく、勿論かつこう程もあり、其後外方ゟ實心と言を見たるに、先年大坂表ゟ伊達鳥と云て來たる鳥也、此鳥總身こんぢやうの毛色、背赤くして口の內まつ黃也、足赤く尾羽黑し、至て鳥の形ぶきようなるもの也、實心と云てみたるは右之鳥也、其後九州へ渡見たる時は雨鳥と云て見たり、又其後達摩鳥とて、江戸へ來りたる事有、程なく落たり、餌飼鱣にて等分餌、尤玉子の黃實を入る也、此鳥を佛法僧と云人もあり、間違なり、

〔性靈集十〕後夜聞佛法僧鳥

閑林獨坐草堂曉、三寶之聲聞一鳥、一鳥有聲人有心、聲心雲水俱了々、

〔日本紀略一醍醐〕延喜六年八月□□右大臣〇源光修法華八講、佛法僧鳥來鳴、　十八年八月十三日癸丑、右大臣忠平於五條家、限五日十座講說法華經、佛法僧鳥來鳴樹上、令文人詠詩、　十四日甲寅、夜五條后宮講說之間、佛法僧鳥鳴松樹上、在座詩人賦詩、

〔躬恒集〕延喜十八年八月十三日、右大臣家〇藤原忠平八講おこなふ夜、于時佛法僧といふ鳥なく、有感